

を中心とする胆道系疾患であったが他の2例は肝癌例で部分的な肝内胆管の狭窄をしめすものと考えられる。腸管像が40分以内にみられた28例は15例中例で、胆のう内結石症の大部分の例では40分以内に腸管像がみられた。び慢性肝疾患の半数の例では腸管の出現が40分以上を要した。血中停滞率(20分値)とICG(15分値)の間には軽度の相関($r=0.44$)がみられた。尿中排泄率は投与量に対して1時間11.3%, 2時間14.3%および3時間15.2% (累積量)であった。

その他、コロイドスキヤンの欠損像の判定の補助手段としての意義のみられた症例を数例経験した。

しかし、この薬剤の本来の目的である胆道系機能検査における意義については、個々の症例については興味ある所見のみられた症例もあるが、さらに多くの例についての検討が必要である。

20. ^{99m}Tc -PIによる肝・胆道系シンチの数値解析

伊藤 秀臣 尾藤 早苗
森本 義人 大城 徳成
石井 均 山本 和高
森 徹

(神戸市立中央病院・RI)

^{99m}Tc -PI投与後の動態解析を試み、若干の知見を得た。＜方法＞空腹時に本剤5 mCiを静注し、仰臥位で60分間、 $\Sigma 410$ カメラ、ガンマー11コンピュータで30秒毎のデーターを収録した。心、肝、胆のう、胆道にROIを設定し、各々のdynamic curveを作成し、これをtwo compartment modelを用いて解析した。肝内代謝を示す減衰率を λ_1 、肝への集積速度を λ_2 、血中の速い消失を λ_3 、血中のゆるやかな消失を λ_4 とした。＜結果＞ λ_1 は肝・胆道疾患に異常のない症例では0.015以上、肝・胆道疾患では0.015以下を示すものが多かった。 λ_2 は幅広い分布を示したが、胆のう・胆道異常や黄疸者に低値の傾向を認めた。 λ_3 は胆のう異常者に高値例が多くみられ、これらには

腎描出を示すものが多かった。 λ_4 は、正常人、胆のう異常者に高く肝・胆道異常者に低い傾向にあった。 λ_1 とAl-Paseには有意ではないが、逆相関がうかがわれた。 λ_1 と λ_4 とは $r=0.57$ で有意の相関が認められた。さらにBlood Clearance Index(5分/60分比)を算出したが、正常人及び機能良好者は2.5以上に分布し2.5以下は、全例酵素異常、黄疸を示し、 λ_1 とは $r=0.68$ と良好な相関を示した。＜結論＞以上、 ^{99m}Tc -PIによる動態解析から、 λ_1 が肝内代謝観察の新らしい指標たりうることを示し、これが λ_4 および血中5分/60分比と相関することを示した。

21. 肺疾患患者におけるGa-67シンチの検討

煤垣 寛治 岸本 亮
北田 修 武田 俊彦
菊池 英彰 杉田 実
(兵庫医大・3内)
尾上 公一 立花 敬三
兵頭 加代 福地 稔
(兵庫医大・RI)

当院における肺疾患患者94例の ^{67}Ga シングラフィを検討し、かつ非癌性肺疾患の陽性率が高いことより、諸検査所見と比較検討することにより腫瘍診断の特異性を向上させんとした。肺疾患患者94例中、肺癌63例、非癌性肺疾患患者31例で、それぞれのGa集積陽性率は95%と58%であった。

治療前肺癌63例の組織型別Ga集積陽性率は扁平上皮癌100%、腺癌97%、未分化癌78%となった。なお腫瘍径 9×4 cm, 7×7 cmと比較的大きな未分化癌の2症例でGa集積が認められなかった。このことより腫瘍径とGa集積所見とは必ずしも一致しないと考えられる。

胸水貯留例における ^{67}Ga シンチグラムの検討では、癌性例で13例中12例(92%)にGa集積陽性を認めている。非癌性例では6例中4例で陰性であった。

^{67}Ga シンチ陽性者の諸検査所見を検討したと

ころ、血中 CEA 値を 2 以上と未満の群に分けると、CEA 値 2 以上の群 12 例は全例原発性肺癌であった。 ^{67}Ga 陽性で血中 CEA 値 2.0 以上を肺癌と規定するなら false positive 例 0, false negative 例 5 例、全体としての efficiency percent 75%となる。同様にしてツ反、CRP、赤沈を検討したが efficiency percent が低く有用ではなかった。 ^{67}Ga シンチ単独の場合の efficiency percent は 78%と最も高率であったが、false positive 18 例を認め、false positive 例の除去には血中 CEA 値を参考にした方が望ましいと思われる。なお症例を増やし検討を加えるつもりである。

22. び慢性間質性肺疾患の ^{67}Ga シンチの意義

藤本 繁夫 寺川 和彦
太田 勝康 市原 秀俊
小川 和紀 遠山 忠秀
栗原 直嗣 塩田 憲三
(大阪市大・1 内)
井上 佑一 越智 宏暢
玉木 正男

(同・放)

後藤 武 浜田 朝夫
(市立桃山市民病院)

〔目的〕 び慢性間質性肺病変を有する症例に肺肝 ^{67}Ga -scan を行い、臨床的意義を検討した。

〔方法〕 2 mCi の ^{67}Ga -citrate を静注し、72 時間後に標準型 crystal recti-linear scanner にて肺および肝を含めて scan を行った。判定は正常肺の 0 度から肝臓部以上のとり込みを認める 3 度まで 4 段階に分ける方法によった。対象 44 症例に延べ 56 回の ^{67}Ga scan を施行し、うち 25 例には主として経気管支肺生検を施行し、その病理組織像と ^{67}Ga scan の成績の対比を行った。

〔成績〕 原因不明の間質性肺炎 13 例中 scan 成績 2 度のもの 3 例、1 度 6 例、4 例は 0 度であった。過敏性肺臓炎 4 例、肺サルコイドーシス 4 例、粟粒結核 2 例、好酸球性肉芽腫症 1 例等の肉芽腫

形成疾患および癌性リンパ管炎 4 例、肺胞上皮癌の 1 例は全例 Ga 集積を認めた。病理組織との対比では、大小円形細胞浸潤の強いもの、肉芽腫形成および悪性細胞浸潤を認めるものに Ga 集積を認める傾向があった。一方間質の線維増生の強いものは円形細胞浸潤があっても Ga 集積が認められなかった。

各疾患の治療に伴う ^{67}Ga scan 像の変化は、レ線所見、肺機能成績などと共に経過の判定上有用であった。

〔結論〕 以上よりび慢性間質性肺疾患の ^{67}Ga scan は、各病変の活動性を反映しており、その程度、範囲を知ると共にステロイドなどの治療判定にも有用であると考えられる。

23. 悪性リンパ腫における ^{67}Ga -腫瘍シンチグラフィの臨床的検討

熊野 町子 榎林 和之
(兵庫県立病院がんセンター・放)

病理診断の確定した悪性リンパ腫延 140 例（細網肉腫 71 例、リンパ肉腫 29 例、ホジキン病 41 例、その他 26 例）に ^{67}Ga -シンチグラフィを施行し、その像の意義について検討した。原発巣を確認し得た症例は 66%であるが、なんらかの治療を行った後では原発巣の発見率は 10%と低下した。69%の症例に病巣が多発性とし描出された。140 例のうち頭頸部原発のものは 78 例であったが、このうち原発巣が描出されたものは 40%と低率であった。しかし、この場合、原発巣の描出されなかった症例はすべて治療中か治療後のものであった。頭頸部原発で転移巣が描出されたものは 65%であったが、そのうち胸腹部に集積がみられたものは 59%であった。さらに、頭頸部悪性リンパ腫のうち 76%のものに唾液腺が描出されたが、これは放射線治療を受けた症例であった。したがって唾液腺の描出は放射線治療による唾液腺組織の反応性変化及びそれに続発する唾液腺分泌障害によるものと考えられた。